

SONRISA

そんりさ

Vol.137



グアテマラ視察報告

グアテマラ・パラマの土曜学校(詳細はグアテマラ視察報告)

- | | | |
|----|------------------------|----------------------|
| 02 | グアテマラ視察報告 |石川智子、新川志保子、柴田修子 |
| 06 | ロサリーナ・トゥユクさん京都講演 |太田裕之 |
| 10 | 民芸品仕入れの旅報告 |佐々木玲子 |
| 12 | ナルコ回廊を行く 2 |山本昭代 |
| 14 | ボリビア便り 先住民政治と道路建設 . |藤田 護 |
| 16 | ラ米百景「ファノンからチェヘ『新しい人間』」 |伊高浩昭 |
| 17 | ケチュア語詩集「アイランプ」より |栗原重太 |
| 18 | 音楽三昧♪ペルー「マリネラ・リメーニャ」 |水口良樹 |
| 20 | メキシコ食巡り「牛肉レモン炒め」 |ミゲル・アクーニャ |
| 21 | ニュースクリップ |サザエ |
| 22 | 安藤栄里子さんが歩んだ道 |太田裕之 |

グアテマラ ― 戦時性暴力の

刑事裁判に向けた展開

柴田修子

アルタ・ベラパス、イサバル、ウエウエテナンゴ、チマルテナンゴ県の女性たちが参加する「変革の主体」プロジェクトが2010年に戦時性暴力を裁く民衆法廷を開催して、ちょうど2年が経過した。2011年石川智子さんの報告にあるとおり、法廷に参加した女性たちは現在、刑事裁判に向けた準備を進めつつある。この春グアテマラを訪れ、ECAP（社会心理行動と共同体研究グループ）、MTM（世界を変える女性たち）やプロモーターの女性たちに進捗状況について話を伺ったので、ここに報告したい。

活動のやり方は、基本的には以前と同じである（「変革の主体へ」という名称は現在使っていない）。女性たちは村には内緒で活動を継続し、月1回ミーティングを開いている。プロモーターが連絡役を務め、定期的にグアテマラシティで行われる研修にも参加する。ECAPが心理サポートやプロモーターの研修、MTMが法的なサポート、UNAMG（グアテマラ女性連合）が広報を担当しながら、活動を広げつつある。民衆法廷開催後一番大きな変化は、

匿名での告発から、実名を名乗ってでも刑事裁判を行いたいという方向に気持ちが向かっていったことだという。

そのための準備として、2011年の段階では次の二つのことが計画されていた（詳しくはそんりさ131号石川さん報告）。一つには国の責任を追及するため、米州人権委員会に提訴すること。もう一つは加害者を直接裁くため、国内で刑事裁判を行うことである。

このうち刑事裁判については毎年1件ずつ取り上げ、2013年までに3つのケースを裁判に持ち込む予定であった。2012年3月現在、準備が進められているのはセプルサルコのケースに関する国内刑事裁判で、他県のグループは刑事裁判に向けた準備には時間がかかりそうである。米州人権委員会への提訴は、この問題について政府に関心を持たせるための手段として重要だと考えているが、いまのところ具体的には進んでいない。法律面を担当しているMTM代表のアナ・ルシア・モランによれば、人的・金銭的資源が限られているなか、すべてに手を広げるより、できることからはじめしていくという方針に変更したという。

セプルサルコは、イサバル県エル・エストル市にあり、ケクチ語系先住民が暮らす村である。隣接するアルタ・ベラパス県同様大規模農園が広がっており、1970年代後半から土地を求める農民運動が盛んとなった。1980年代に入ると、この地域では土地紛争鎮静化のため農園ごとに軍駐屯地が置かれるようになり、

セプルサルコにも1981年から86年まで駐屯地が置かれた。そこに女性たちが当番制で滞在させられ、政府軍兵士のために炊事洗濯などのほか、性奴隷になることを強要されていたという。このケースについて、2011年9月イサバル県の女性たちが刑事告発を行った。4人の検事が現地に派遣され、聞き取り調査が行われた。民衆法廷に参加した女性たち15人に、命令に背いたため拷問を受けた元軍コミッショナーなど5人の男性が加わり、20人が軍駐屯地で行われていた拷問や殺害の実態を証言した。2012年1月から2月にかけて軍事・歴史・医学・心理学など8つの分野で専門家証言が行われ、ジェノサイドと人道に対する罪で刑事告訴されることが、正式に決まった。グアテマラの刑事裁判は、まず訴えたい案件について検察に告発を行い、それを検察が調査することから始まる。調査の結果から事件性があると判断されれば、検察が裁判所に告訴する。その際、事件関係者が共同告訴人になることもある。これは義務ではないが、今回のケースではMTMとUNAMGが共同告訴人として、裁判をサポートすることになった。

駐屯所内に秘密墓地があることは生存者たちの証言からわかつていたが、セプルサルコではひよんな偶然から12月にそのなかの一つが発見された。土地の持ち主が簡易トイレを掘る工事をしたところ、遺骨が5体見つかったのである。このときの作業員の一人がECAPのコーディネーター、アマリアのいとこで即座に彼

女に連絡したため、遺骨の存在が明らかになった。これは裁判を進める上で、有力な証拠となると思われる。ほかにも秘密墓地があるという証言があったため、2012年3月12日から15日にかけて、新たな発掘作業が行われた(石川智子さんが同行)。しかし住民の証言が食い違つて場所の特定が難しく、結局5日間の調査で遺骨を発見することはできなかった。

この件に関する証拠収集のため、現在隣接するアルタ・ベラパス県ティナハスの秘密墓地発掘を計画中である。イサバルとアルタ・ベラパスは県こそ違うが、ケクチ語系で同じ文化と歴史を共有している。ティナハスの駐屯地はこの地域では中心的な存在で、内戦が激しかった時期、周辺の村からの強制移住に使われていた。証言者によれば日常的に拷問や殺害が行われており、犠牲者は2000人以上に及ぶと目され、秘密墓地は51あると考えられている。この地を発掘する理由は、駐屯地の中心的存在だったことに加え、15人の証言者のうち13人の夫が、ここに埋められていると推察されるためである。彼らの遺体が見つければ、女性たちの証言の信憑性が高まり、有力な証拠となる。また当時の所有者はすでに故人で、現在はチャビル・ウツアフという製糖企業所有となっており、駐屯地だった時期の出来事に責任が生じる心配がないため、交渉が進めやすいと考えられていた。3月下旬に発掘作業が行われる予定で私たちも同行することになっていたが、残念ながらチャビル側の

合意が得られず、発掘は中止された。(この原稿を執筆中の5月9日、秘密墓地発掘により32体の遺骨発見との連絡があった。できれば4月中に加害者を逮捕したいとのことだったが、5月現在、逮捕者が出たかは不明である。)

今回 ECAP、MTM、プロモーターの女性たちに話を聞いた印象では、裁判に関して若干温度差があるように思えた。裁判を早く進行させたいと考えているのは、MTMである。現在、2010年から検事総長を務めているのはクラウディア・パス、グアテマラ初の女性検事総長である。人権問題に理解があり、戦時性暴力をめぐる状況にも詳しい彼女がいたことは今回のケースを取り上げてもらうにあたり、幸運だったとアナ・ルシア・モラン(MTM 代表)は語る。法律の専門家である彼女たちにしてみたら、検察トップが人権問題に理解を示しているあいだに、裁判を行いたいと考えるのは当然かもしれない。一方、ECAPは、裁判そのものが目的ではなく、コミュニティ全体の支援活動を行っているため、裁判に関しては慎重な姿勢である。いまのところ嫌がらせはないものの、証拠収集が進むにつれ、被害女性たちに危害が及ぶことがないか心配している。一方、女性たちに寄り添って活動しているプロモーター(彼女たち自身、村の出身であり、ECAPの研修を受けて橋渡し役を担っている)は、村に起きるかもしれない変化をより敏感に感じていた。いまのところ「変革の女性たち」グループの活動は村で知られておらず、裁判についても

秘密裏に準備を進めている。しかし村では人々が互いの様子に敏感であり、裁判で証言する日が来れば、いつまでも隠していられないだろう。そうしたときにどのような嫌がらせを受けるか考えると、恐怖にとらわれそうになるという。また、証言者のなかには、高い地位の司令官が逮捕されるのは歓迎だが、同じ村から逮捕者が出るのとは考えている人もいる。地元で逮捕者が出ると、報復される心配があるからだ。この地域のプロモーターアナ・アリシアは、MTMのやり方は少し性急であるように思えると語っていた。

このように、立場によつて考え方は異なっているものの、刑事裁判を成功させたいという思いは一つである。なかでも被害者の女性たちは「正義」を求めており、刑事裁判を進めたいという強い意志を持っているとジュデイス・フラソ(ECAP 代表)は言う。また、秘密墓地の発掘は性暴力だけでなく、ほかの犯罪告発にもつながる作業である。行方不明の家族を探してほしい人や、遺体が発見された遺族による真相究明の要求など、今後活動が広がっていく可能性があるという。

グアダループ協同組合 コミュニティ教育視察報告

石川智子、新川志保子

グアダループ協同組合とのミーティング

(3月23日) 代表マリア・デル・ロサリオさん他役員7名参加

チマルテンango県ポアキルでのコミュニティ教育について話を聞きました。

コミュニティ教育は3ヶ所(ポアキル町内、パラマ、パネヤ)で給食付きの土曜学校を行なっています。ポアキル町ではグアダループ組合事務所で、パラマとパネヤは小中学校の建物を借りています。2月4日からスタートしました。(プロジェクト開始にあたっての報告と子どもの名簿と教師は先日お送りした資料の通りです)

アドバイザーが年間の指導計画を作成しており、教師はそれに基づいて各回の授業計画を作成しています。毎回出席簿もつけています。アドバイザーは毎月1回各クラスを訪問し、授業の様子を確認し、必要に応じて教師にアドバイスをし、その評価を文書で役員会に報告しています。アドバイザーによる最初の評価が出たところで、3人の教師は合格、このまま続けてもらうことになりました。他にプロジェクト・コーディネーター(フロリダルマ)が時々各クラスを視察します。

給食

給食はグアダループ事務所で調理し、パラマとパネヤにはバスで運搬しています。当初はそれぞれの場所で調理する予定でしたが、ポアキルでまとめて作った

ほうがコストを抑えられること、

また、コミュニティでは母親たちが料理のバリエーションを知らない(普通は豆とトルテイージャのみ)ためです。調理はグアダループ組合の役員と各クラスの母親1名ずつが担当しています。



▲ポアキルの土曜学校での給食の様子

子どもたちは給食をととても楽しみにしています。私たちが視察したときは、中華風の「チョウメン」(鳥肉と野菜の焼きそば風)とトルテイージャという人気メニューでした。

適切な栄養価のある給食を提供するため、保健省の栄養士に相談しメニューのアドバイスを受けることにしたそうです。また、調理担当の女性たちへの調理研修も行ってもらえることになっています。(メニュー例:①鶏スープ、鶏肉、トルテイージャ2枚、レモネード、②牛ひき肉とフリホーレス豆、トルテイージャ2枚、チーズ、ジュース)

問題点・改善が必要な点

子どもたちの欠席が目立つ回があったそうです。季節

節の変わり目で体調を崩して欠席する子どもが多かったためですが、母親からの連絡はありません。

クラスは午前8時から午後4時までとされていますが、実際にやってみると8時間は長すぎるようです。特に、休み時間に遊べるもの(ボールなど)もないので、小さな子どもは集中できなくなったりします。また、雨季になると道がぬかるみ子どもたちを遅く帰宅させるのは心配なこともあり、授業時間を1時間短縮して様子を見ることにするとのことでした。

給食は正午に出していますが、朝食を食べずに来る子どももいて、午前中におなかがいっぱいになって集中できないという問題もあります。午前中に軽食(こちらで一般的なのはアトルというトウモロコシ粉の重湯のようなもの)を出すのが理想ですが、そこまで予算が回りません。給食の時間を早めるなどの工夫をしたいということでした。

ポアキルのコミュニティスクールおよび家庭訪問 (3月24日)

1. 午前中にパラマのクラス訪問(生徒数35人) Ⅱ次ページ写真。パラマはポアキルから未舗装の道を車で25分行ったところにあります。ハリケーンの被害を最も強く受けた地域の一つです。

小学校の施設を借りて、クラスを行なっています。栄養失調の問題を抱える子どももいるとのことでした。クラスに親に連れてられて伯母一家が面倒を見ているという子どももいて、その家を訪問しました。

ポアキルのクラスをお昼時に訪問(生徒数38人) 昼食の様子を見学。皆席について行儀よく食べている。楽しそうな様子でした。給食はおいしいとのこと。

家庭訪問1

軒…夫が家を抵当に入れた女性宅。毎日どうやって生き延びるかという辛い思いをしているが、子どもたちを土曜スクールに受け入れてもらったのがせめての救いということでした。



3. 午後、パネヤのクラス訪問 (生徒数35人)

パネヤはポアキルから未舗装の道を車で20分ほど行ったところにあります。この村はブラックベリーの栽培が盛んで、あちこちにビニールハウスがありました。訪問したとき、絵を描く授業を行っていました。描けた絵をしまう手作りの紙製バッグが人数分壁にかけてありました。歓迎の証として絵バッグをプレゼントされました。

パネヤでは3軒の家庭訪問をしました。そのうち一軒は、娘が土曜学校に行っています。小学校1年を3回落第しているとのこと。やはりスペイン語での授業についていけないようです。土曜学校のクラスに助けてもらい、今年こそ及第したいということでした。

— 私たちの感想 —

また始めて2ヶ月弱ですが、上記に述べたような改善が必要な点もありますが、全体にうまくいっているように見えました。カリキュラムや生徒の出席簿、アドバイザーによる評価など活動の記録をきちんと文書で残し、随時

グアダループ組合—教師—アドバイザーが連絡を取り合い、問題があればすぐに対応できる体制もできています。プロジェクト・コーディネートと組合メンバーの女性たちが子どもたちとその家庭の様子もチェックし、きめ細かく対応しています。



▲パネヤの土曜学級で。

子どもたちもとても元気に大きな声で答えたり歌ったりしていて、楽しく学んでいる様子が伝わってきました。また、正規の小学校に行っていない子どもも受け入れ、あるいは学校に通っていても教師のスペイン語のみの授業についていけない場合もあり、そのような子どもたちが学べる場になっています。小学校で二言語による授業ができる教師はまだまだ少なく、そのためにについていけない子どもも多いのです。今回視察した地域はマヤ・カクチケル語地域で、家庭ではすべてカクチケル語、子どもたちはスペイン語を聞くとかなりわかるけれど、話せないのだそうです。

それぞれのクラスの先生も頑張つて、視覚的に子どもたちが覚えられよう工夫を凝らしていました。ただ、子ども35人を教師一人で見るのはかなり大変では、と思いました。そのことをグアダループへの人たちに伝え、例えば、コミュニティのなかで教員養成学校(農村部では通常中学校を終えるとさらに上の学校に上がることも教員養成、会計士養成などの専門学校に行くことが多いです)に通う学生の実習を兼ねてクラスを手伝ってもらうことはできないだろうか、と案を出し、検討してもらうことにしました。

今回の訪問では、グアダループ組合の皆さん始め、3人の教師、そしてお会いした親御さんたちみなさんから、このシナピスの支援にとっても感謝しているとおっしゃっていただきました。特にグアダループ組合の教育担当であるマリアナさんは、このような子どもたちの教育の場を作るのが長年の夢だった、と感無量の様子で、私たちも嬉しく思ったことでした。

グアテマラ

ロサリーナ・トウユクさん来京講演

太田裕之

グアテマラのマヤ先住民族女性で、内戦下の軍による弾圧で夫を虐殺された女性たちの団体「連れ合いを奪われた女性たちの会」(略称コナビグア)の共同設立者、ロサリーナ・トウユクさん^{写真}が第29回庭野平和賞を受賞し、5月に来日した。京都市内で開かれたシンポジウム^{写真}での講演の概要を紹介する。

【題】先住民族の智慧と平和構築における女性の役割

今日は私たちマヤの聖なる暦では智慧と理解、生命と知性の本質を示す日です。私がここにいるのはその力のおかげで、また祖先のおかげだと感謝しています。庭野平和財団の平和への決意と、このシンポジウムで経験を共有させて下さることに感謝し、みなさんにご挨拶申し上げます。さまざまな先住民族の集団的な考え方に沿って、時空を超えて私たちが受け継いできた知識が示す智慧についてお話しします。

私たち先住民族、とりわけマヤ先住民族は苦難の時代を過ごしてきました。常に軍事独裁政権や

多国籍企業、党利主義の政治、観光産業、私たちの文化に無理解な政治的野心に攻撃され迫害されてきました。経済的な理由や、私たちの民族の集団的利益にはほど遠いさまざまな思惑もあります。先住民族の智慧を語ることは、軽蔑と搾取、流血、不平等、差別の歴史を語ることもありません。それでも私たちは生きています。人類に貢献し続け、私たちの権利や生き方・考え方を守り続けてきました。信念と精神の修養によって私たちは導かれてきたのです。

私たちの先達たちは私たちの文化の根幹で、人生や文化の本質を教えてくださいました。私たちが存在する意義は、物質的、社会的な責任を果たし、祖先たちのように観察し、耳を傾け、行動し、保全することにあります。これが私たちの宇宙観の基礎です。良い面も悪い面も見つめ、先達の助言を聴く術を知り、経験し学んだことを共有する。自分たちが求めるもの、家族や人類への貢献、母なる大地のケア、領土・領域を守ることに照らして、常に自らの行動を見直せる。そうして今と未来の命の連続を保証するのです。先住民族、とりわけマヤ民族には、過去・現在・未来を結びつけて考えることが重要です。母なる大地や水、空気、聖なる火などの本質的な要素は確実に守らねばなりません。この偉大な智慧の中に女性の智慧があり、先祖伝来の種を先達と共に大切に活用・維持し、用意することに大きく貢献しています。その

種を蓄えるための実践的な知識が果たす役割は、何カ月も続く祭礼の仕事にもなりません。

また、先住民族は歴史的に共同体の森林を大切に守ってきました。生物多様性を保障し、水や動植物、人間の命を守ることでもあります。各民族は共同体の森林を保護し、各種の香草を栽培し、動植物相を守っています。

私たちの知識には、様々な行事や、ある年齢を迎えた時に口述でなされる教えもあります。主な教えは長老の助言です。若者の年齢、性別、誕生日にに応じて振る舞いを教え、仕事の中で段階的に学ばせます。各家庭で、地域の文化、各自の生来の天性に応じた習得が日々実践されます。秩序、礼儀作法、良き振る舞い、他者の尊重、素直さ、人間関係、母なる大地と万物への責任ある態度を学びます。精神の修練、他人と分かち合う心、喜びの時も苦しみ時も連帯すること、マヤの宇宙観の価値と真理の実践、人間と母なる自然、宇宙の創造者との関係の理解と実践、エネルギーの次元と私たちの内なるエネルギーの存在を知ること、誰もが支え合っていることを理解すること。これらすべてを学びます。

能力の土台は文化やビジョンにあります。私たちの学校は、日々、新しいこと、良きことを学び、実践することにあります。学習は継続され、何千年にも亘って経済、政治、文化、マヤ民族の社会

における知識が維持されてきました。農業、料理、建築、数学、天文学、芸術その他の分野に専門家がいます。それぞれが各自の知識をもって貢献します。誰にも居場所があり、誰もが貢献するので

す。

教育の主役はお年寄りです。最も大きな智慧の蓄積があるからです。彼らが子孫を導く役割は、共同体のしきたりの根底をなします。健康、教育、正義、もめ事の解決、発展、調和、家庭や共同体の結束、母なる大地との調和に関する知識を与えるのはお年寄りたちです。マヤ民族にとって大地は聖なるもの。生きとし生けるものの命の継続と深く結びついているからです。

私たちの文化、先祖伝来のしきたりを守る上で基礎的な役割を果たすのが女性です。女性は調和と責任をもって、様々な病気への医薬の技術や処方方の知識を守ります。お年寄りと女性は婦人科や産科、母親のケアと指導、子どものケアと健康に基本的な役割を担います。私たちの存在の根本には霊的な導きがあり、エネルギーと結びついて人生の確かな道を導くのです。霊的な実践は、何度も破壊されようとしていたり、無視、軽視されようとしてきた状況にもかかわらず、何百年も存続してきました。別次元で生きる祖先たちとの調和と一体感、深い結びつきの土台となっています。

次に、平和の構築における女性の役割とは何を意味するのか。私たちのコミュニティでは、平

和とは、平穏や充実した人生、すべてに満たされた状態、調和、精神のバランスのとれた完全な生活に近づくことに似ています。平和を維持し、貢献し、進化するために、女性はいかなる地域でも国でも主人公です。飢えや窮乏、人種差別、失業、疎外、不平等、苦難、家庭崩壊、恐怖、暴力、戦争の恐怖、識字率の低さと低開発で最も影響を受けるのは女性です。私たちは最大限の知性と慎重さ、決断力、智慧、勇気をもって、直面する大きな問題の解決方法を探るのです。常に家族や共同体を思い、段階ごとに神の啓示を受け、生命を尊重して守り、注意深く継続します。命の恵みと幸せを損なわないよう、私たちが幸せにしてくれるものを大事にします。暴力を受けても復讐せず、むしろ対話と尊重を築くよう行動します。解決策を提案し、一体感と喜びを探ります。命、家族、民族を愛し、常に子ども達の未来を考える。自らの権利を保障し守るため、社会、国家、その他の状況に向き合います。グアテマラや他の多くの国々で、私たち女性は命を守る旗印を掲げ、虐殺に苦しんで正義を求め、社会の軍事化と闘います。このために多くの女性が暴力の対象となり、殺されてきましたが、民族や人類の調和を進めるため、今日の私たちは光であり、力であり、大切な支えなのです。私たちは社会的にも、環境の面でも、

経済的にも、大きな不平等の時代を生きています。だからこそ、女性は平和の歴史に貢献し、平和の文化を織りなすツールとなれるのです。

マヤ女性として、日本のすべての女性を励まし、力とエネルギーを呼び起こしてほしいと願います。母なる大地の揺れと津波に見舞われましたが、尊厳を持って立ち上がっていただきたい。命を存続させ、家族の力、国が歩み続ける力となるために。世界の女性たちに言いたい。不正義と暴力、不平等のただ中であって、私たちは力と才能を備え、平和のためのツール、闇を照らす光、命の希望なのだ。

女性の立場から、私は世界の平和のために働くすべての人々を励まし、尊敬します。平和は正義の果実。正義は兄弟間、民族間、異なる文化の出逢いの果実でしょう。先住民族は精神の時を経て、人類の創造と母なる自然、命の創造主の關係に貢献し、大切にし、維持してきました。

知性の力、理解と寛容により、異なる信仰が見え、尊重できますように。すべての人に、みなさん一人一人に、私たちマヤの聖書にある励ましと祝福の言葉をお伝えします。「すべての民族に大きな平和が訪れ、幸いであり、有用な存在でありますように」。女性も男性も誰もが智慧を備え、人間としての命と母なる自然、万物に貢献することです。すべての人が暴力ではなく命を育てることを引き受けますように。

【質疑】

(司会) 政府と先住民族の間、加害者と被害者、支配者と被支配者の間で和解はどのように行わ

れているのか。マヤ文明・文化の宇宙観の中で、人間に対する赦しの問題はどうか考えられるのか、どう具体化されるのか。日本では3・11の地震と原発事故があった。原発事故は進行中で、私たちは人間と自然の関係を問われている。どのように考えられるかお聞きしたい。

(ロサリーナさんの回答)

和解はとても重要なテーマです。私たちは武力紛争の被害者であり、和解を待ち望んでいます。しかし、グアテマラには誰も責任を取らないという問題があります。

和解のためには、20万人の死者、6万人の行方不明者、超法規的に処刑され、どこに埋められているのかが今も分からない5万人以上の人々、これらの被害の責任が誰にあるのかを知ることが必要です。私たち被害者は奪われた最愛の人たちを探してきました。どこに遺棄されたのかも含め真実を知りたいのです。

次に必要なのは正義です。人間の命が奪われることは容認できません。神はいつでも赦す用意があるとされます。私もそう思います。では誰が私の父と夫を殺したのか。和解にたどり着くには、まず、誰に責任があるのかを知る必要があります。真実と正義を私たちは求めています。

法律は尊重するために作られたと思いますが、今日、そうはなっていない。グアテマラでは25万人の死者がいますが、誰も責任を取らない。

2度と同じことを起こさないためにも正義が必要で、殺すことに慣れきった人たちがいるのは正義がなされないからです。

一方で、和解のためには国家が責任をとり、被害を止めることも必要です。文化的、財産的、精神的被害への賠償です。多くの女性たちが（虐殺が激しくなってきたからこれまで）35年間を生き延びてきましたが、夫を失い、子どもを抱えて途方に暮れ、精神的に病んできました。戦争は私たちに重いトラウマを残しました。彼女たちが本当に人生を取り戻せるようにする必要があります。グアテマラでの和解はいま少し遠い状況です。

第1の理由は正義の欠如、第2に責任の所在が不明なこと、第3に公的機関の意欲の欠如です。

私たちは愛する人たちがどこにいるのかを知りたい。私は父と夫を23年間探してきましたが、どこに埋められているのか、どこに遺棄されたのかも分かっています。私たちは文化として、死者をきちんと埋葬したい。死者にも平穏が必要なのです。死者の多くが手を縛られたままだったり、目隠しをされたままだったり、そうでなくてもどこかに投げ捨てられたままです。

次に、母なる自然との関係ですが、今日の人間はプラスチックでできているようですね。仕事や食べ物、生活に恵まれてさえいれば、他人に何が起きても無関心です。食べられない人がいる一方で、食べ物を捨てる人がある。とんでもなく不公平です。環境を汚染する人と、その汚染を心配し

なければならぬ人がいる。

マヤの信仰では、特にこの終末の時代には、母なる自然の権利を回復しなければなりません。今、地球は危機にあります。地球温暖化や地震、台風に見舞われています。エネルギーや食料がなくなれば人間はどうするのか。私たちはこの地球に起きていることに敏感でなければなりません。大地や自然の草花、動物たちの命に敏感でなければいけない。人間が痛み苦しむ時には他の生き物も痛み苦しんでいるのです。

この日本で起きたことにより、私たちは価値観の転換に目覚めました。自然の中に人間もあるのです。この地球が、この大地に生きる全てのものに求めている緊急の呼び掛けなのだと思えるべきではないでしょうか。私たちは自然が再生できるように見直さなければなりません。自然は、地球が私たちの手当を必要としていることを感じられるよう教えてくれているのです。私たちにまだ空気や水、大地や食べ物がありますが、これから25年、50年後の世代には水も残されていないかも知れません。私たちは自然の痛みへの敏感さを取り戻さねばなりません。何よりも、利己心と闘い、大地を犠牲にして富を追求することと闘わねばならない。今日の気候変動は、富を重ねてきたことの結果です。責任は私たち自身にも、政府にも企業にもあり、その結果を私たちは知っています。私たちは思慮深くあり、自然が苦しんでいる変化に気づかなければなりません。



写真 1. 記者会見でのロサリーナさん

【ロサリーナさん略歴】
1956年、グアテマラのチマルテナンゴ県でマヤ・カクチケル語族の農家に生まれ、15歳で識字教育を行うカトリックの青年グループに参加。82年に父親が軍に拉致・殺害され、85年には夫が行方不明に（治安部隊により殺害されたとみられる）。自身も3回の拉致未遂に遭う。同じ境遇の被害女性たちと88年にコナビグアを設立。「子どもたちを兵士にされたくない」と強兵徴兵制廃止や自警団（右派民兵組織）の解体などを求め、内戦終結（96年）後は被害者への補償要求や女性の政治参加、内戦で殺害された被害者が遺棄された「秘密墓地」の発掘、内戦の先住民族の権利回復にも取り組む。96年から1期4年間、国会議員を務め、04年には国家補償委員会の委員長に任命された。05年にはノーベル平和賞候補にもなった。



写真 2. パネリスト席から臨むシンポジウム会場



Felicitades...

【民芸品仕入の旅報告】

佐々木 玲子

皆さま、こんにちは。私は今年も民芸品担当者と
してグアテマラへ商品仕入のため渡航させていた
だきました。ご協力に心より感謝いたしますとともに
に、旅の成果をここに報告いたします。

今回は昨年と同じ3つの生産者グループと、1
ヶ所のマーケットを訪問し、布製品とビーズアク
セサリーを即時または発注生産後買取で購入し
ました。買い付けのために計上した予算(13万
円)をほぼ使い切る見込みです。

1. 生産者団体別詳細

① テヒードス・グアダル・ペ協同組合
訪問日…2012年3月23、24日

所在地…チマルテナンゴ県サンホセ・ポアキル市
仕入内容…布小物、衣料品、カバン類

ここでは、人気商品を再仕入れたほか、新規商
品(エプロンなど)を日本からの型紙を基に発注し
ました。また、ミシンを使つての縫製作業を見学し
たところ、整頓された環境と馴れた仕事ぶりから、
組合がより多様な商品を生産できる可能性を持っ
ていることを予感しました。

ただし、一方で気懸かりな情報もありました。原
材料の綿糸の単価が、昨年比で1.4倍に跳ね上が
り、織布の在庫が尽きかけているというのです。こ
こでは、市販の綿糸を手織りで布にし、採寸・裁断・
縫製を行っているため、布がないと、事実上受注生
産に陥ります。発注から受取までの期間が現状のか
らさらに伸びる恐れがあり、何より生産自体が減少
していくことが危惧されます。

組合は、地域の貧困家庭の子どもに補習授業と給
食を提供しており、マイクロクレジットを実施する
計画も始めています。レコムが販路開拓を進めてマ
イナスにはなりません、組合の多角化する事業間
の優先順位を把握することが必要です。

② サンホセ女性手工芸家協会
訪問日…同年3月25日

所在地…ソロラ県サン・フアン・ラ・ラグーナ村
仕入内容…天然染色綿マフラー・シヨール

ここは観光の客足を確保するために、店舗を移転
していました。以前は街外れにあったのが、村の表
玄関である栈橋から伸びる目抜き通りから路地へ
入ったところで、角には看板も出ていました。

天然染色ならではのやわらかな無数の色が、民家
の軒先に踊る様子は、郷愁を感じさせます。マヤの
女性たちが自分たちの村で伝統の染織を守ること
で、より主体的に生きられるようになって欲しい。
そう思わせる原風景でした。中南米といえば強い日
光にも褪せない鮮烈な原色(今日これらの多くは化
学染料による)が連想され、それはそれで高い芸術
性を持ちますが、民芸品を好むお客様の中には天然
ものの志向の方が多いので、ここに力を入れた販売促
進ラインを検討したいと思いました。

現状は、納品まで予定より2週間長くかかり、シ
ミが見つかって染め直しをお願いすることになっ
たりと、品質管理の課題は見受けられますが、これ
は開発途上国でのもので、つきものです。專業
化による高速・低コスト大量生産に近似したシステ
ムを求めるのではなく、生産者の生活リズムを尊重
しながら、品質を向上させる方法を検討する必要が
あります。

③ モスタンシージャ

訪問日…同年3月26日

所在地…ソロラ県サンティアゴ・アティトラン村
仕入内容…ビーズアクセサリー

このグループは少人数で事業所と受注の拠点が
ないため、私たちは、同じ村のADISA(サンティ
アゴ・アティトラン障害者と親・友人の会)の仲介
で買い付けをしています。今回は製作者を紹介して
もらい訪問することができました。

ピックアップタクシーで村の中心から10分ほ
ど走ったところにあり、コンクリート作りの平屋に
広い中・前庭がある典型的な民家でした。

サングラスをかけないと目がくらむような日差
しの中、小さな影を落とす庭木があり、その下のテ
ーブルでアントニア・チビリウさんが製作中でした。
メガネもかけずに、直径3ミリほどの無数の玉をテ
グス糸に通しては引き締めて形にいきます。傍
で見ているだけでも途方もない根気とコツのいる
作業だと分かります。にも関わらず彼女は、マヤの
女性らしくはにかみながらも、親切に話を聞かせて
くれました。

手芸技術は親戚から見取りで習ったこと、一日か
かって製作できるのは星型モチーフとケツアル型
がそれぞれ2個づつであること、私たちが3月に入
ってから注文した品も出上来がったことが分かり、
私は驚きと感謝でいっぱいになりました。

商品はADISAの事業所に預けてあるとのこと、
私はもつと話を聞きたい衝動を抑えつつ、向かいま
した。そこで事業コーディネーターのホセさんと再
会。(移転したばかりだそうで、繁華街からは離れ
ているものの教育省の保有地内にあり、賃借契約料
が無料になったそうです。)検品すると、デザイン
が食い違うものもありましたが、私が過去に仕入実
績があったので現物の写真を見せずに注文したせ

いでした。今後の教訓にいたします。誠実に期限を守ってくれたことに感謝し、上がっている原材料費のことも考えて、買取単価を相場の Q15 から Q18 に上げて購入しました。

むしろ気懸かりなのは、ビーズ手芸を導入した人物の後継者が、取引先を囲い込んだままモスタンシージャから脱退してしまったという情報でした。業務や人脈の属人化は、グアテマラでは先住民族のコミュニティに限らず根深いものだけに、グループの現状は注視していかなければいけません。

④ 民芸品マーケット

訪問日…同年3月25、26日

仕入内容…羊毛製衣料品、トドスサントス織のカバ

ン・ポーチ、ビーズアクセサリー

所在地…ソロラ県パナハツチエル市

デザインを多様化し、または生産者団体に新商品の製作を依頼する場合の実物見本を入手するため、グアテマラ有数の観光地で仕入を行いました。首都やその近郊のマーケットでは民芸品の単価が高いので、収益性を考えての判断です。

人気商品のトドスサントス(ウエウエテナンゴ県の村。毎年11月1日の草競馬で有名)織は毎年同じ店で購入しているのですが、女性たちから着古したウイピル(伝統衣装。この村のものは、刺繍のように細かい縫い取り織が隙間なく施されており、人気が高い)を集めてリサイクルして製品化していることが分かりました。丈夫な生地が、しなやかになるまで使い込まれたのちに再生されているとなれば、ヴィンテージ的価値もPRできます。こうして店先での会話を通じて情報を得ることの大切さを再認識しました。

2. まずは自らの足元を

レコムの限られた資金と人員で、効果的に支援するにはどうすればいいのか。今回の旅は、この疑問を深く掘り下げる必要性を裏付けました。

個人的には、年内は民芸品の通信販売も実施してみて、対費用効果の判断に貢献したいと考えています。ただし、日常の業務に携わる者が私一名で、仕入の旅以外は基本的に無償ボランティアという状態では、民芸品を会の運営資金にすることはできません。グアテマラとレコムの広告媒体として機能させるだけで、労力上限界です。

奇しくも今年はレコムの創立20周年にあたります。私たちのとるべき手段。民芸品事業の目標をどこに置くか。生産者団体への働きかけに先立ち、知恵を出し合って決める時機に来ていることを提案いたします。



① テヒードス・グアダルupe 共同組合のマリアナ・チュタさんと。

彼ら彼女らのために、
私達ができることとは？



② サンホセ女性手工芸家協会のフアナさんと。



③ モスタンシージャのアントニア・チビリウさんと。



④ ADISA のホセ・ソソさんと。

ナルコ回廊を歩く(第二回)

メキシコ北部国境地帯を訪ねて

山本昭代

4. マラソン民族タラウマラ

終点のチワワの少し手前、チワワ鉄道で一番の観光拠点となっているクリールの駅で下車した。クリールは山岳地帯の小さな町だが、メキシコ人や外国人の観光客であふれている。駅前の広場には、周辺の村からタラウマラの女性たちが土産物を売りにやって来ている。



▲チワワ鉄道の途中駅で停車中の1等車に土産物を売りに急ぐタラウマラの女性たち。

小学生くらいの子たちがあまたについてきて、「空腹なんだ、1ペソくれ」と小聲でいう。あまり得意がいいとはいえない素焼きのネックレスなどを差し出して、「10ペソ」という子どももいる。まだ夏休みなので、子どもたちも「ずかい稼ぎに精を出しているのだ」。

毛糸を腰機で織っている女性もいた。写真を撮っていると、いきなり「10ペソ」という答えだった。タラウマラの人たちは物静かです。者と話しやべりたがらず、地元のメステイソン(混血の人)たちがアグレッシブな物言いをするのとは対照的である。

私は物売りの女性たちの脇に座り込んで、中学生く

らいの女の子にタラウマラ語を教えてもらったりして

いたが、日もとつぷりと暮れた時刻になっても彼らはまだ帰らない。彼らの姿が広場から消えた

のは夜の8時過ぎ、雨が降り始めたころだった。よちよち歩きの子どもたちと大きな荷物を抱え、しかもほとんどが女性ばかりで、雨の中をう時間歩いて村まで帰って行ったのだろうか。この地域には、村と村を結ぶ乗り合いバスなどは皆無である。こんなふうに毎日長距離を速足で歩くことで、100キロ以上の距離を走りぬく脚が鍛えられるということだろうか。

タラウマラの有名なマラソン競技は、年に1度、春の聖週間に開催される。男性たちが村ごとにグループになり、木製のボールを蹴りながら、山道を昼も夜も走り続けてゴールを目指す。距離は200キロに及ぶこともあるという。女性たちも女性同士で脚を競い、長いスカートをひらめかせながら、こちらは輪つかけを棒で転がしながら走るといふ。一度は見たいものだ。

クリールでは、周辺の観光地をツアーで回り、壮大な渓谷の風景を堪能した。絶景を前にしてちよつと首をかしげたのが、大きく開けた絶壁の手前が、幅広く立木が伐採されて整地され、ちょうど軽飛行機が離着陸できそうなほどの広場になっていることだった。大型の観光バスが来ることもあるかもしれないが、何十



▲観光地で土産物を売ったり、写真のモデルになったりして稼ぐ子どもたち。

台駐車しても余りそうな広さである。2か所の溪谷で同じ風景を目にしたが、なんでもありのメキシコで、この辺りが麻薬の栽培地域と聞けば、ナルコの軽飛行機やヘリが利用しているのかもなどという想像も、まぎら外れていないかもしれない。

近くのタラウマラの村では、伝統的な自然の洞窟を住居にしている家を見学させてもらった。山岳の奥地に行けば、今でも洞窟を利用した家がいくつかある。うだが、旅行者が普通に行けるような場所ではない。われわれが訪れた家は、観光客に写真を撮らせて謝礼を受け取るのを商売にしているとのことだったが、雑然とした軒先に栄養状態の悪そうな子どもが座り込み、周りにはハエが舞っていた。いかにも貧しげなたたずまいに写真を撮るのも申し訳ない気持ちにさせられた。たまたまこの家がほどく貧しかっただけかもしれないが。

観光地ではどこでも伝統的な衣装を身に付けたタラウマラの女性たちが手作りの土産物を売っているが、男性の姿を見かけることがほとんどない。タラウマラの男性は、白や色柄のポンチョの下に短いスカートを付け、引き締まった脚をのぞかせてなかなかカッコいいのだが、地元の人にたずねると、「女に働かせて、男は家で酒を飲んでいるのさ」という人もいたが、実際は村の男性たちはほとんどがチワワなどの大農園に出稼ぎに行っているらしい。鉱山に出稼ぎに行っている人もいっている。

今年(2012年)に入ってから報道で、タラウマラの居住する山岳地帯では10か月にも及ぶ大干ばつで、地元の農業は壊滅的な打撃を受け、先住民は深刻な食糧不足に襲われ、集団自殺があったとするうわさまで流れた。これは地元の当局によって事実ではないと否定されたが、すぐ北の国境の向こうでは飽食をほしきままにしているというのに、なぜ彼らはこれほどの貧困に追いやられているのか。

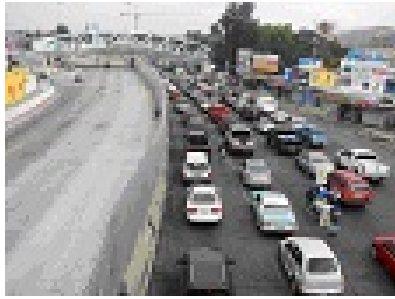
5. 行きはよいよい、帰りは：

さてさて、来た道と同じ道筋をたどり、1週間の旅を無事に終え、ティファアナまで戻ってきた。ロサンゼルスまで行くのに、また国境を歩いて渡ってバスに乗るのは面倒な気がしたが、何事も経験と、早朝からロスまでのバスの切符を買い、しつこいタクシーの声を振り切つて、また重いスーツケースを引っ張つて国境の陸橋を歩いて渡った。8車線もある高速道路を陸橋の上から眺めてみると、片側はガラ空きなのに、反対車線は長い列になっている。メキシコからアメリカに入国する車が、入管の前に並んでいるのだ。

陸橋を下りて目に入ったのが、入国管理局の建物の前か延びる長い人の列。自動車だけでなく徒歩の人たちも、延々と並んでいるのだ。先頭がどこかも見えないほどで、列は数百メートルはあっただろう。うろろろして

いると並んでいる人からあつちが後ろだと教えられた。周りの人に聞くと、入管待ちの行列は毎日のことで、この日は30分ちよつとの待ち時間でまだましなほう。日によつては1時間以上待たされる

こともあるそうだ。屋根も何もない場所に立ったまま、カンカン照りでも雨でもお構いなし。アメリカ人もメキシコ人も、同じように並ばなくてははいけない。並ばずに入管を通れるのは、特別な許可書を持った人だけ



▲アメリカと国境を結ぶバスと自動車の列

だという。「行きはよいよい、帰りは怖い」とはこのことだったのか。

それでも、そこは南米熱心なメキシコ人。行列の人の退屈しのぎのために、ギターを抱えた歌手が移民の悲哀をうたつた自作らしいコリード(物語歌を歌っていたり、朝食用のタマレス(トウモロコシの粉で作ったちまき)やいい香りのコーヒ、新聞・雑誌なども売りに来る。旅の平安を祈るお祈りをして、かわりに喜捨を求める車いすの男性の姿もあった。たまたま隣にいた女性がおしゃべり好きだったので、おかげでいろいろ教えてもらえ、退屈せずに済んだ。

やつこのことで入管手続きを終え、午前8時半にはアメリカ側に出ることができた。しかしここでもまだひと安心というわけにはいかなかった。トレス・エストレージャスというメキシコのバス会社のチケットを買っていたのだが、ターミナルの窓口で聞くと、8時の便の次は11時までないという。メキシコ側でチケットを買った時には1時間に1本あるといっていたのに。チケットのキャンセルもできないという、窓口でいくらけんか腰で交渉してもらちがあかない。同じように「だまされた」と怒っていた客もいたが、メキシコ人のほうがあきらめが早いようだ。11時まで待つてやつと乗ったバスの隣りに座った女性は、「客が少ないときはいつもこうやつて運行を間引くのだ」と落着いていたものだった。

このバスも乗客はおそろしくみなメキシコ人かメキシコ系で、バスの運転手もスペイン語でしか案内しなかった。同席した女性はクリアカン出身だといひ、15歳の時に母親に連れられてアメリカに移住し、もう30年以上アメリカで暮らしている。最近ほ定期的にメキシコの病院に通っているという。国境地域のアメリカ人は、こんなふうに医療費を節約をしているのだ。道理でティファアナでは、病院やドラッグストアや葦葉

菌料がやたら目についたわけだ。彼女は、ヘスス・マルベルデについては個人的には関心はないが、ロサンゼルスでもマルベルデの像やお守りのペンダントなどを売っている場所があると教えてくれた。クリアカン出身者にとっては、懐かしい故郷の顔でもあるのだろう。

日本に帰ってから外務省の「海外安全ホームページ」を見てみた(見るのが遅すぎ)。私が今回訪れたティファアナもクリアカンも、治安が悪く、殺人事件が多発しているとして「十分注意してください」という地域のリストに入っていた。今回訪れなかったシウダー・フアレスは『渡航の是非を検討してください』とワンランク上の警告である。外国人としては足を踏み入れなければいいわけだが、その土地に暮らす人にとつては、危険だとわかっていても、おいそれと逃げるわけにはいかないことの方が多いだろう。日本の福島周辺の人々と同じことだ。メキシコでいつかこの麻薬戦争が終わり、犯罪被害に遭う心配もせずに外を歩ける日は来るのだろうか？ 国境の向こうに違法とされる麻薬がなしにはおれない人々があり、一方で新自由主義の名のもとに庶民の暮らしが切り捨てられていく状況のなか、根本的な解決を望むのは実際のところ難しいかもしれない。それでもいまの状況が好転し、かの国で若い人たちが未来に期待が持てるようになってくれることを祈りたい。

(やまもと) あきよ… 非常勤講師。著書『メキシコ・ワステカ先住民農村のジェンダーと社会変化』(明石書店)メキシコ麻薬密輸カルテル関係の情報を集めたウェブページ <http://www.aquiyoy.jp/> も随時更新中

ボリビア便り（その十一）

藤田 護（注1）

イシボロ・セクレ先住民領有地・国立公園（TIPNIS）を縦貫する道路建設計画をめぐり、二度目の低地先住民行進が、4月27日に出発し、ラパス市を目指しています。昨年の行進の結果として道路建設中止の法令を勝ち取ったのですが、今年に入り政府のバックアップの下で政府支持側のデモ行進が行われた結果、2月に、道路建設の是非を問う住民協議を行うという内容の、すなわち道路建設を中止ではなく「オープンな」議論に委ねるという形で後退させた法令が再度可決されることになりました。

ボリビアのTIPNISの問題は、エボ・モラレス政権の性格や、国家と社会の関係について、新たに考えるべき課題を提示しているように思えます。モラレス大統領が選出されたことがボリビアの先住民を巡る社会状況を大きく変えたことに疑いの余地はありませんが権力の座についた後のモラレスと与党の社会主義運動党（MAS）が本当に先住民の味方なのかについては、様々な局面で疑問が呈されてきて、このTIPNISの問題はその最新局面です。高地先住民が入植して低地先住民を押し出すという構図は、低地先住民に対する差別や状況に関する無知と併せて、決してボリビアで新しい問題ではないのですが、今回の件を通じて社会全体のアジェンダ

として注目されるようになったと言えますよう。表面的には対話の姿勢を見せながら、裏で低地先住民運動を貶めようと複数の策謀を展開するモラレス政権に対し、かつての白人政権と何が違うのだろうかという批判がはじめていることも事実です。モラレスとその政権は、今後どのような道を辿ることになるでしょうか。

以下に、ボリビアを代表する反骨知識人である社会学者シルビア・リベラ・クシカンキが、自らも属するグループ「エル・コレクテイボ・ドス」（大学で社会学を専攻するシルビアの指導学生らが中心となっています）と共に、昨年の行進の際に発表した声明を、先方の許可を取った上で私が訳出したものを引用します。昨年の時点で一度公開していたのですが、現時点で再度読み返されるに値する内容だと思えます（注2）。

死者を出すことにノー、暴力的衝突にノー

ータイプニス紛争についてー

2011年9月18日、ラパス市

この書面に署名した者たちは、サンフランシスコ教会前広場に設置された監視団に自発的に参加し、イシボロ・セクレ国立公園の先住民の行進によって引き起こされた対立が解決されることを要求する。脅迫や騙りや暴力という手段に訴えるべきではなく、ユクモ村に向かう途上にある何百人もの女性男

性、お年寄り、そして子どもたちを「吹っ飛ばす」という脅しがなされるべきではない。私たちは、傲慢なふるまいに対して、そして行進に加わる者たちの動機を貶め、彼ら／彼女らを「変革の過程（proceso de cambio）」と称されるものへの反対者として見せかけようとする言いがかりに対して、反対の声を上げる。

発展や、国の偉大さという、既に時代遅れになった観念の旗手となった現政権の主要指導者らによって、何十年も前から自由主義ナショナリズム、そして新自由主義を担ってきた右派たちの開発主義的な夢が再び具体化しようとしている。それは、森林をなぎ倒し、セルバ地域を「生産的」な農牧業の土地へと変え、先住民をエコ・ツーリズムの隙間あるいはショーウィンドウへと追いやるものである。そこでは先住民は、自らの生態・生産面に関する知識を放棄し、「インディオ」という装束をまとい、消滅の過程をたどる種族として、国境を越えた観光客たちの同情の対象となるのだ。

現在の対立を取り巻く指導者層の利害をみると、おべっか使いの汚れた指導者たちの悪意ある暗躍と、何人かの先住民指導者たちの政治的野心などがあり、これが行進に加わる者たちを出口のない隘路へと導き、これらの者たちの生命と安全を深刻な危険に晒すことになってしまった。罪のない子どもたちが馬鹿げた対立の犠牲者や殉死者となる可

能性があり、これは民主主義的共存のいかなる形にも反する侵害である。

多くの人が発言していて、言葉は溢れているが、行動が足りていない。しかしながら、コリヤス・ユ先住民行政体連合

(CONAMAQ)、ボリビア先住民女性連合(CNMB)、ベニ県先住民族連合(CPIB)

など様々な社会組織が、芸術や文化活動に携わる若者たちと共に、公の場面に姿を現すこととなった。これらの組織と人々は、言葉から行動へと移るようにと、怖れからであれ打算からであれ轡と自己検閲に屈しないようにと、私たちに呼びかけている。政府がこの紛争に対して示してきたような、ひどく無骨で盲目的なやり方に対して、私たちがオープンに顔を覆い隠すことなく声をあげるようにと呼びかけている。国の側の主要な登場人物―エボ・モラレス（大統領）や内務大臣サチャ・リョレンティ―が公の場に姿を現していないことは、いざれ起こる衝突と流血の事態に対して自らに火の粉が及ぶことを避け、自らの支持勢力―自らが誘惑し腐敗させた勢力―の側に罪をなすりつけようとする条件が整いつつあるのではないかと疑わせる。したがって、我々はこの監視団とそこから生み出される全ての行動に自発的に参加し、以下の点に基づく呼びかけを行う。

1. 対立と暴力が紛争を支配し、右派と墮落した東部諸県勢力の政治的打算が再興する土壌となることを許すことはできない。これ

らの勢力が開発主義的政策を最初に打ち出したことを忘れるべきではなく、そして現在アルバロ・ガルシア・リネラ（副大統領）とその取り巻きが恥を忘れてそれを推進しているのである。

2. 何百人の女性男性、お年寄り、そして子どもたちに対して渦巻く、死と抑圧の脅迫を前にして、我々は無関心でいることはできない。これらの人々は、いかなる政治的利害と打算以前に、どのような建設会社との契約署名についても、自らの祖先からの生活領域に押し付けられようとする開発モデルについても、事前の相談を受けなければならないとする、憲法上認められた自らの権利を行使しているだけである。

3. エボ・モラレス政権が対外的に格好よく発した「大地の女神 (pachamama) の権利を守る」という宣言とは裏腹に、全てを略奪する開発主義は土地に対する侵害であり、我々の兄弟姉妹である先住民の人々が何世紀も維持してきた、もう一つの共同体的経済のあり方に対する侵害でもある。

4. 私たちは、すべての物質的または知的な創出にかかわる分野に存在する、良心ある人々、地域に根差した組織、環境主義のグループ、労働者たちなどに対し、この監視団に加わり、政府が我々に押し付けようとする開発モデルについて公の討論を行い、演説の言葉と実際の公共政策の間の乖離を助長する

二枚舌の姿勢を拒絶し、暴力と騙しによってこの紛争を解決しようとする民主主義の殺害をくい止めるよう呼びかける。

タイプニスの行進において、一人の死者も出さず、一人の負傷者も出さない

略奪的開発主義に関するオープンな議論を知識人だけでない全ての人々の間での対話を模索しよう

脅迫、二枚舌、嘘はもう十分だ

生命と民主主義と母なる大地の権利を守るために

大地の母神に万歳

発起人：El Colectivo 2

(Beatriz Chambilla Mamani, Nina Mansilla Cortéz, Violeta Montellano Loredó, Rolando Pinaya Pérez, Álvaro Pinaya Pérez, René Puchó Alejo, Silvia Rivera Cusicanqui)

(注1) ボリビア・カトリック大学客員研究員

(注2) 一点私自身の見解との間に相違があり、この段階でシルビア（彼女は私の先生でもあります）は、道路建設を推進したのはモラレス大統領自身ではなくガルシア・リネラ副大統領とその取り巻きであると考えていますが、私自身はどうもそうではないようだと考えています。

連載第四三回『リット』

伊高浩昭(リット・ジャーナリスト)

第六一巻

ファノからチェコにわたる

「新しい人間」

革命家エリネスト・チェゲバ(一九二〇〜六六)は、アフリカ滞在中の一九六五年に『社会主義と人間』という論文を書き、そのなかで「新しい人間」という概念を打ち出した。ゲリウ戦士が自己改造を遂げつつ人民のために戦う無私の革命的人間は「二一世紀の人間」に成長していくという考え方だ。いわば、チェゲバ自身を投影させた「期待すべき革命家像」を描き出したのだ。

私は、この論文を読んだ後、リット・ファノ(一九二五〜六六)が死の直前に世に出した『地に呪われた者』(六八年、みすず書房)を読んだ。そして直観したのは、チェコの「新しい人間」はファノから来ているということだった。チェは六〇年八月一九日の保健省での

講演で「新しい人間像」という言葉を使ったが、そのような発想があったから、ファノの思想を受け継ぐことができたのだと思う。

チェが初めてアルジェリアに行ったのは六三年六〜七月で、七月三日の独立一周年記念式典にキューバ代表として出席するためだった。チェは少年時代に、上流階級出身の母でリアからフランス語を教え込まれた。革命後、フランスとジャーナリストたちやサルトルとフランス語で質疑応答している。フランスやボリビアのゲリウ戦の陣地では、フランス語教室を開いていた。読書好きのチェが六二年以降にファノを読んだのは想像に難くない。六四年末には、アルジェでファノと大々的な談話している。

ファノは、フランス植民地軍を相手にしたアルジェリア独立戦争(一九五四〜六二)のイデオロギーであり、植民地解放戦争の過程で「新しい人間」の概念に到達した。明らかにチェに先行する理論立っていた。二つの「新し

い人間」には革命的暴力の肯定、人間疎外を打ち破る文化の創造、目覚めた人民の育成など一致点が多い。

ファノは独立の日を待たずに夭折したが、思想を継いだ。その一部である「新しい人間」は、社会主義革命過程に移行したキューバの最高指導者の一人だったチェが発展させた。北アフリカ生まれの思想の重要な部材が、チェによつて米に移植され拡がったのだ。チェがボリビア行きに備えていた六六年一月ハバナで第一回アフリカ・ラジアル・ラミ三大陸人民連帯機構(OSPAAA・リオス・パル)会議が開かれた。その背景には、ファノとチェの思想的リレーがあったのだ。

月刊「LATINA」は五月に創刊、六〇年、通算一〇〇回に達しました。五月二〇日刊行の「四回」は、その特集です。伊高浩昭執筆の「ラミと反戦」連載第四回は、この二年以来の二〇年間のラミ情勢を大い線と紹介する予定です。他にも数回の特集記事が掲載されています。

こども

Wawa

こども、いとしいこども
未来への希望
国はあなたを望んでいる
立派な大人になることを



あなたがいてこそ
希望を持ち続けることができる
そのために、あなたは成長する
あなたの祖国を喜ばせるために

若草のように
あなたは美しい
そして、木々のよう大地から
すくすくと伸びてくる

体は小さいけれど
あなたは、とても大きい
悪を知らずに
小鳥の心を持っている

今日の日を
人々はこどもの日と言う
美しいあなた達を
喜びに満ちて祝福する

わたしは、今日の日に
孤児たちもいることを
社会が決して忘れない
そのように願う

さらにこどもの日の
今日以降
苦しむこどもたちがなくなればなら
ない
地球上すべてから

そのためには、何が必要であろうか
私は提案したい
大人たちの心が
隅々まで美しくなければならないと

作者：アリシア・テラン・デ・ディク
詩集アイランプより
訳：栗原重太

「マリネラ・リメーニヤのハラナな魅力」

水口良樹

今回は、ペルーから生まれてチリ、ボリビア、アルゼンチンへと広がった「サマクエカ」のリマのスタイルである、マリネラ・リメーニヤ（写真1）を紹介したい。マリネラ自体については第三回で簡単に概説し、ノルテーニヤ（北部スタイル）については二六・二十七回で詳しく紹介しているが、もう一つの重要な首都リマのスタイルについてはこれまできちんと紹介して来なかったため、今回少し掘り下げて紹介出来ればと思う。

十八世紀後半、即興で紡がれる歌と踊りがスリリングな新しい音楽がリマの下町で少しずつ流行し始め、やがてサマクエカという名前で呼ばれるようになった。スペインを中心とするヨーロッパの音楽的要素と、アフロ系のリズムが結びついて生まれたとされ、瞬く間にラテンアメリカで大流行することになった。近隣諸国の流行を受けて、初めは顔をしかめていた上流階層も徐々に受け入れ始め、ペルーでも十九世紀半ばには国をあげて愛される音楽へと発展した。流行とともに各地にそれぞれ地域色豊かなマリネラが生まれ、またそれぞれのスタイルで踊られ、また時代の流れの中で、名前もサマクエカからチレーナ、そしてマリネラへと変化していった。二〇世紀の半ばまで、マリネラはフイエスタの花形で、もともと盛り上がる踊りであり歌謡であった。

余談であるが、リマのスタイルのマリネラは、実はチリのクエカと非常に似通っており、なかにはほとんど

と同じ曲もある。これはペルーからチリへと渡ったサマクエカが、今のマリネラ・リメーニヤと大差がなかったからなのか、もしくは、チリで盛り上がったクエカがペルーに逆輸入されチレーナという名前で大流行した際、当時のチリのスタイルがリマに残ったためなのかは分からない。しかし、個人的には非常に想像を掻き立てられるポイントである。



写真1

さて、それでは実際にマリネラ・リメーニヤについて見ていこう。

マリネラ・リメーニヤは、徹頭徹尾フイエスタの音楽だった。バリオと呼ばれるリマの下町で、音楽に心奪われた堅気の楽師たちが即興で音楽を紡ぎ、そのリズムに誘われて多くの人たちが踊り明かしたという。このようなフイエスタ（パーティーや、そこで歌い踊って騒ぐことを「ハラナ」といい、クリオーヤ音楽の音楽性を象徴する言葉となっている。そしてマリネラ・リ

メーニヤこそ、別名として「ハラナ」の名前を冠された、クリオーヤ音楽の精神性を最も体現した音楽であったといえる。

バリオで愛されたリメーニヤは、即興でいろいろなコブラ（韻を踏んだ四行詩を引用したり新しく創作しながら、その場その場にあった歌を組み立て、時には複数の歌い手による歌試合にも発展しながら楽しまれた。まさにクリオーヤ音楽の故郷とも言える下町バリオで鍛えあげられ、長らく愛された所以である。そして、狭い家や中庭に人々がひしめき合う中で踊ることになったので、マリネラ・リメーニヤは極めて省スペースなペアダンスとして発展し、狭い空間でいかに粋に踊るか、という美学が生まれた。派手にアクロバティックに踊るのではなく、狭い空間ゆえ、小さな体の動きで最大限に魅力的に見せる洗練された所作がマリネラ・リメーニヤでは発展した。この意味で、リメーニヤは他の地方のマリネラと大きく異なる美学を持っていると言える。

フイエスタの中で、ひとしきりバルスやボルカなどで歌い踊って盛り上がった後、満を持して登場するのがマリネラ・リメーニヤだ。多くの場合、フイエスタがもともと盛り上がった真夜中にマリネラは踊られ、数曲のメドレーの後、より心をかきたてる踊り「レスバロサ」にスイッチし、さらにテンポアップする。このマリネラ・リメーニヤからレスバロサへの転換も非常に重要なリメーニヤの特徴だ。レスバロサもマリネラ同様八分の六拍子の踊りだが、マリネラ以上に歌詞もリズムもヒートアップし、踊り手を煽るように演奏される。

このようにフイエスタに無くてはならないマリネラだったが、五〇年代以降、アフロペルー音楽の復興と

流行の中で、徐々に踊られる機会は減っていった。今なおバリオでは演奏されているようだが、若手の音楽家たちの中には、人気のあるノルテーニャ(北部スタイル)は演奏できてもリメーニャは演奏できないという者も少なくない。踊りも同様で、様々な型を即興で組み合わせながら踊るリメーニャは、バルスやフエステホ、サルサやクンビアなどに押されて踊れる人の数もすっかり減ってきている現状にある。

しかし、ここからは私個人の好みの話だが、「もう流行も終わった古い音楽か」と思わずぜひこのマリネラ・リメーニャを聴いてみて欲しいと強くおすすめしたい。アフロ音楽復興に尽力した黒人即興詩人ニコメデス・サンタ・クルスが詠んだマリネラ・リメーニャを称える詩の冒頭の「ギターがカホンと呼び、カホンから歌へと連なる。耳を澄ませてよく聴いて！マリネラが始まるよー」という掛け声は、そのイントロからマリネラ・リメーニャがいかに人々の心を熱くかき立てたかを示しているように思う。激しく響くギターの低音弦とかき鳴らされる高音弦。細やかに、そして激しく打ち鳴らされるカホン。そうしてそのリズムにのせて伸びやかに歌い上げられる即興の歌とその機知に富んだ内容は、その全てがマリネラ・リメーニャが「ハラナ」と呼ばれた理由を否応なく知らしめてくれると言っている。

最後に、極上のハラナことリメーニャが聴けるアルバムを幾つか紹介したい。バリオで自分たちのための演奏の中で即興で歌うのがよしとされたリメーニャだが、バリオの外、商業として発達したマリネラ・リメーニャは即興ではなく作曲家が計算して作り上げた「作品」になっている。それ故にその聴きどころも変

わってくるが、こちらも同様に素晴らしい作品が数多くある。一般に聴くことができるリメーニャのほとんどはこの商業用の作曲家がいるタイプのものである。ただ、多くはアルバムに数曲はいっている程度多くは一曲程度で、なかなかリメーニャだけが入っているアルバムというのはいない。そういうことも理解していただいた上で、興味があればぜひ下記の音源を聴いてみてほしい。

最初に紹介したいのは、フイエスタでがやがや騒ぎながら音楽を演奏して楽しんでいる雰囲気そのままで録音されたかのような「ヘンテ・モレナ」の録音。CD化の際にビクトリア・サンタ・クルスのアルバムとカップリングされて発売されているが、この演奏の雰囲気は本当に素晴らしい。また、先程紹介したビクトリアの弟のニコメデス・サンタ・クルスの「ソカボン」には、メドレーで止めどなく演奏されるマリネラを聴くことが出来る。ちなみにこのアルバムの前半はアフロ系楽器の紹介とデモ演奏、真ん中にはニコメデスが詩を吟じているのが入っている。また、一九五八年にアフロ音楽復興の嚆矢となったホセ・ドウランが録音したロス・クアトロ・アセス・デ・ラ・ハラナのCDがイギリスから出ている「写真②」。このアルバムは派手さはないが、全編マリネラ・リメーニャを淡々と演奏しているという非常に珍しい歴史的音源だ。また、変化もあつて入りやすい音源として、ギタリスト、カルロス・アイレを中心にしたリマのそうそうたるミュージシャンが参加して作ったアルバム「ビハ・ラ・マリネラ」がある。LP版は全編リメーニャの計一二曲だったが、CD版が出る際にノルテーニャなどの他の地方のマリネラやリメーニャなども加えられた。なかなかの名演が多いが、リメーニャはレスパロサを含まな

い物が多い。また、オムニバスのリメーニャ曲集として、レスパロサも含めた名演を集めた「マリネラス・リメーニャス・ラス・クラシカス」はおすすめだ。ただ、なかなか手に入りにくいかもしれない。その他にもいろいろなアルバムにマリネラ・リメーニャは収録されているので、ぜひ意識して聴いてみてほしい。バルスやアフロペルーとはまた違う興奮と出会える音楽です。

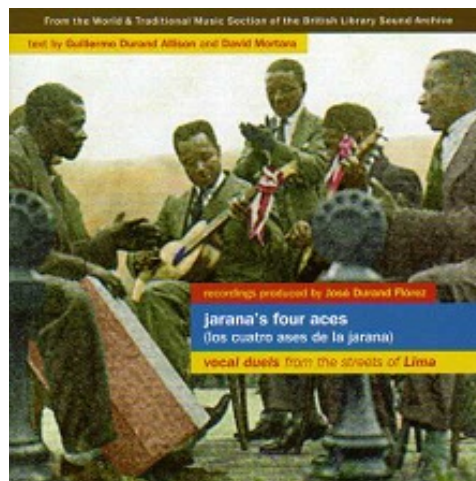


写真 2

ミゲル先生のメキシコ食巡り 牛肉のレモン炒め

CARNE DE RES AL LIMON

今回は安くて手軽な牛肉料理「牛肉のレモン炒め」を紹介します。ごはんや食パン、フランスパンのおかずにぴったりです。

牛肉はスペイン人の侵略と共にもたらされ、メキシコでは1550年ごろから食べられるようになりました。それ以前、マヤの先住民は、豚肉やイノシシの肉で同様の料理をつくっていました。

私の母は朝昼夕を問わずこの料理をつくり、白ごはんやサフランライス、パンといっしょに出したり、サンドイッチにしたりしていました。中学・高校生のときには弁当にもらい、ジュースを飲みながら食べるのが楽しみでした。父もランチボックスに入れて職場にもっていきました。

ユカタンではマヤの人を含めてだれもがこの料理を食べています。



たとえばフランスパンや食パンでユカタン風サンドイッチにするときは、フリホーレスとトマト、マヨネーズ、レタスを添えます。ジュースやビール、ワインと合います。

ごはんのおかずにするときは、ゆでて適当な大きさに切ったジャガイモやフレンチポテト、レタスやキュウリを添えてもよいでしょう。

日本に来てからも、食材を買いそろえて調理する時間がないとき、この料理は重宝しています。牛肉とレモンと、どの家の台所でも常備している材料があればよいからです。

今回はゆでたジャガイモを添えました。

.....

■材料 4人分

- ・細切りにした牛肉 400グラム
- ・レモン 1個
- ・水 50ml
- ・粉末かペーストのニンニク 適量
- ・胡椒 適量
- ・塩
- ・ジャガイモ中 2個

■作り方

1) ジャガイモをゆでる。柔らかくなりすぎて崩れないように注意する。

- 2) レモンの皮をむき、種を取り除き、果汁を搾る。
- 3) 細切りの肉が大きすぎたら食べやすい大きさに切る。
- 4) まず、弱火で油を使わずに肉を軽く炒める。おたまでよくまぜて、レモン果汁を加え、塩こしょうで味を整える。弱火でさらに炒め、最後に水を加え、水がほとんどなくなってソース状になるまで炒めつづける。
- 5) 大きめの平皿に盛りつけ、レモンのソースをスプーンで飾る。ゆでて切ったジャガイモを盛りつける。

チリ - マプーチェ 先祖代々の土地が不当に奪われる--

チリは国連開発計画によれば人間開発指数が高い国だが、生活向上はマプーチェの人々まで届いていない。マプーチェの一人当たりの所得は他地域の3分の1にすぎず、マプーチェ女性が家長である家庭の3分の1が貧困ラインを下回る。今年4月にラテンアメリカ・カリブ地域経済委員会（CEPAL）とマプーチェ土地連合（ATM）が出した報告によれば、不平等と社会的排除の原因はマプーチェ民族が生活と文化のよりどころである土地を失っているからだ。彼らの居住地域で業者による森林伐採・農牧畜が進み、表土の消失や水源枯渇などが起きている。サンティアゴから700km南に位置するエルシージャ共同体では、業者が森林を伐採し松のプランテーションを作りその領土の40%を失った。

ピノチェット軍政時代の1974年に「森林開発法」を制定しマプーチェ共有地を廃止された。不当に奪われた土地の回復を求める運動に対してテロ活動防止法（1984年）を適用して取り締まっている。2010年7月、これに抗議してマプーチェ囚人34人がハンガーストライキを行ない、政府とマプーチェの対立は悪化した。その後マプーチェ活動家によってサンティアゴの国際労働機関やCEPALの事務所が占拠されるなど、抗議行動は激化した。これらの実力闘争や国際連帯によって、反テロリスト法による告訴をとりやめさせることに成功。また彼らが軍事法でなく一般の刑法で裁かれるよう軍事法改正の審議が国会で進んでいる。（Noticiasaliadas.org/2012/04/13より）

ラテンアメリカ - 外国資本による土地収奪

南米で外国企業や政府による農地の買い占め（ランドグラビング・土地収奪）が進み、食糧安全、雇用、家族経営農業への打撃が懸念されている。とりわけ食糧生産国のアルゼンチン、ブラジル、パラグアイ、ウルグアイで外国資本による土地の集中化が進んでいる。ウルグアイの可耕地は1600万haあるが、過去10年で630万haが売却され、その83%が欧米、ブラジル、アルゼンチン、ニュージーランド、韓国の資本の手に渡った。土地価格も7倍に跳ね上がった。

昨年11月の国連の報告書によると、農地が外国資本に買い占められバイオ燃料の原料生産や鉱山開発、観光開発のため使われている。外国政府も土地を買い占めており、中でも韓国は中国、サウジアラビアを抜いて世界で最も農地を買い占めている国だ(230万ha)。中国は南米4ヶ国で生産された組み替え遺伝子大豆の全てを消費している。2010年、アルゼンチンの裁判所は南部のリオネグロの土地25万4千haの中国企業による買収を禁止した。今年2月にはアルゼンチン北部のチャコ県が、サウジアラビアの準国営企業に原生林20万haを売却することに合意した。そこには6万人のウイチ先住民族が暮らしており、強制移住させられることになるだろう。国連報告は売る側の政府の問題も指摘している。国庫収入を上げるために公共資源を売り渡しているからだ。これら南米4カ国は世界市場の半分を占める大豆を生産しているが、この産業は外国企業の手中にあり、みな遺伝子組み換えで有害な除草剤を大量に使っており、人々の健康と生態系に大きな害を及ぼしている。（noticiasaliadas.org/2012/4/25より）

米国 - 増え続ける不法移民の強制送還、国境での暴力

オバマ政権になってから不法移民の強制送還が急増し、2011年だけで40万人以上が強制送還された。その殆どはヒスパニック、特にメキシコ人。米国では親の国籍に関係なく子どもが生まれると自動的に米国籍を持つが、米国生まれの不法移民の子たちは「アメリカ人」なので送還にはならず、施設に送られる。こうして2011年だけで5000人の子どもが親から引き離された。また、国境警備員による過剰な暴力も増え、2年間に8人が国境で警備員に殺されている。そのうち1件はメキシコ側にいた若者を国境警備員が米国側から射殺した。別の1件は、無抵抗のメキシコ人を警備員数名が電気銃と棍棒で殴り殺した。いずれも立件されていない。（democracynow.org Apr 24, 2012, May 2, 2012より）

安藤栄里子さんが歩んだ道

元夫・太田裕之

今年4月14日、レコムの会員でレコム事務所・図書館の主、安藤栄里子さん(享年42歳)が逝去されました。彼女はグアテマラを初めて訪ねた1995年からレコムに関わり始め、03年に多発性骨髄腫という血液のガンを発症してからも入退院を繰り返しながらレコムの活動を支えました。グアテマラ・マヤの人々との出会い、レコムでの活動が大きな根拠となった彼女の取り組み・生き方を振り返り、想いをみなさんと共有して、これから共に歩んでいきたいと思っています。

彼女が初めてグアテマラと出逢ったのは95年7月。レコムの招きで来日した「マヤの権利を守る会」代表、ファン・レオンさんの講演を大阪で聴いたのがきっかけでした。当時、京都新聞の記者だった彼女は、記者仲間だったレコム会員、藤井満さんに誘われたようです。凄まじい暴力・抑圧を受けながら立ち上がるレオンさんらの姿に感銘を受け、その年の8月にグアテマラを訪問。レオンさんの他、軍による虐殺で連れ合いを奪われた女性たちの会「コナビグア」の共同代表、ロサリーナ・トゥユクさんらの活動に触れ、帰国後に連載記事で紹介しました。この過程で、レコムの中心で活躍されていた青西靖夫さん、梅村尚久さん、石川智子さんとも知り合います。レコムが続

けるグアテマラからのスピーキングツアーで、京都での講演を担当していた「中南米と交流する京都の会」にも参加。9月には国連北京女性会議に参加後に来日したコナビグアのマリア・カニルさんらの講演を取材しつつ、運営にも関わりました。

こうして彼女の活動は大きく動き出します。96年12月にグアテマラで和平合意が結ばれた際には、レコムと各地のスピーキングツアー受け入れグループに呼び掛けて、日本からの「友情と連帯の横断幕」を作成し、梅村さんに託して現地に届けました。

97年にはグアテマラの人権活動家で姉を暗殺した軍の責任を追及したヘレン・マックさんの京都講演を担当。「京都の会」の設立者でレコムにも参加していた私と結婚し、新婚旅行先はグアテマラ。石川さんの計らいでコナビグアでも披露ホールを開いていただきました。京都新聞を退職した栄里子さんは99年、自らが中心となってファン・レオンさんを招き、京都や長野などで講演会を開催。外務省や国会議員会館も訪れ、福山哲郎氏や土井たか子氏、福島瑞穂氏らと面談し、福山氏が参院経済・産業委員会やグアテマラへの政府支援について質問するという成果もありました。

00年にはグアテマラのカトリック教会が内戦中の人権侵害の真相を究明し、正義に基づく和解を目指した「歴史的記憶回復(レミー)」プロジェクトの報告書の日本語版「グアテマラ 虐殺の記憶——真実と和解を求めて」が、新川志保子さんと山本慎一さんの尽力で岩波書店から出版されました。栄里子さんはその出版資金のカンパを呼び掛けるリーフ

レットを鞆に入れて持ち歩き、友人はもちろん、さまざまな市民グループの集会に出かけたり、飲み屋のカンターで座り合わせた人に配ってレミーのことを紹介し続けました。出版記念としてキチエ教区司教のフリーオ・カブレラさんらを招いた講演会を11月に企画。さまざまな協力団体を募って2500枚のチラシを配り、講演会には130人もが集まり、報告書も50冊を完売しました。12月にはレミープロジェクトに参加したヨランダ・アギラルさんと、東ティモールの戦時暴力被害者のフランシスカ・ソアレスさん(いずれも女性国際戦犯法廷・国際公聴会で証言のため来日)の講演会も開きました。

当時のそんりさへの報告の中で栄里子さんはこう書いています。「レミーの精神が普遍化し、あらゆる環境に生きる人々の問題意識につなが込まれている。講演者の「証言」を消費することなく、そこから何を編んでいくのか、繰り返し、考えたい。感じたことを自分の言葉で言語化し、語らえるような場づくりこそ、本当は求められているのではないか」

彼女は以前から「同じ平和や人権でも、市民運動はそれぞれにタコソボ化する傾向がある。縦だけでなく、横につながる必要がある」と考えていました。いろんな集会に足を運んではレコムを紹介してきた梅村さんの姿に学んだことでもあります。そして翌年、レミー講演会を通して知り合った、在日朝鮮人問題や従軍慰安婦問題、ハンセン病、平和学など様々なフィールドで活動する人たちと定期的に語り合い、それぞれの枠を越えて交流する場を設けて「よいいとネットワーク」と名付けました。もちろん、

梅村さんも一緒でした。彼女の活動はグアテマラとレコムを通して、さらに開かれたのです。

一方で彼女は鍼灸師の資格を得て京都で開業し、東京勤務の続いていた私と03年に離婚。その直後に多発性骨髄腫との診断を受け、医師から「余命2年」と告知されました。当時34歳。これから、という時です。そこで彼女を支えたのがグアテマラの女性たちの姿でした。告知の瞬間を、2年後に彼女が振り返った文章があります。

『「ゴー」という耳鳴りを覚え、カラダごと壁に塗り込められていくような感覚に襲われた／なぜか脳裏には次々と久しく遠のいていた人たちの顔が浮かんでくる。ロサリーナ・トウユクさん、ヘレン・マックさん、ヨランダ・アギラルさんら。いずれも危険に身をさらしながらもあしたの平和を願って闘うグアテマラの女性たちだ／「運命」と「絶望」にすくい取



られてはいけない。呼吸を整え、根を張ろう。彼女らのように根を張ろう／死と向き合うことは孤独を知ることだと思う。ロサリーナさんたちはそんな孤独の床を割り、さらに深く根を張った。その下には人々の「祈り」が地下水脈のように流れているのだろう。想像を絶する彼女たちの強さと思うとき、いまがそんな絵が浮かぶ」

入退院を繰り返しながら彼女はレコムの活動を続けました。そんりさの發送作業は彼女と私の自宅で行うようになり、彼女は作業後の宴のために料理を準備。レコムの会員に加え、それぞれの友人知人も参加して、互いに活動を紹介し、語り合う場になりました。04年8月に梅村さんが急逝されてからは、その遺志を引き継ぐ気持ちもあつたと思います。レコムの代表に就かれた古谷桂信さんの力もありました。そんりさの發送作業と宴を通して、初めて出逢った人と人を結びつけるのが彼女の喜びでした。

06年6月、マヤ女性活動家のアナ・ペレスさんのスピーキングツアーでは、京都での講演を開くに当たり、従軍慰安婦問題に取り組む市民グループやピースウォークのメンバーたちに協力を呼び掛け、準備・運営に一緒に参加してもらいました。彼女自身は司会を務めて数日後に入院する過酷な状態でしたが、この時に一緒になった仲間には、その後も深く付き合う友人となりました。

08年、コナビグアの若手女性、ロサ・ペレス・トフさんの講演会を開催した後で、台湾と韓国、元従軍慰安婦の女性を招いた2回の講演会に参加しました。グアテマラとは普段は接点のない聴衆に、彼

女は長い年月を経て尊厳を回復するため声を上げ立ち上がった「元慰安婦」のおばあさんたちの姿が、グアテマラで戦時下に性暴力の被害を受けた女性たちへの力強い励ましになっていることを紹介しました。そして09年12月、松井やより賞を受賞したグアテマラ「変革の主体」の女性2人の講演会を開催。10年2月にはグアテマラの「先住民族女性の民衆法廷」（3月開催）の応援を呼び掛け、4月にはその民衆法廷に参加した石川智子さんらの報告会を開きました。

なされた暴力、被害の真相を明らかにし、責任者の処罰を求めて、和解の道を探り、一度は壊された人間関係の結び直しを目指す。その歩みこそが、グアテマラの人々との関わりを通して、自らも含めて普遍化した「平和のベクトル」（足立力也さんの言葉でした。グアテマラをきっかけに、東ティモール、アフガニスタン、イラク、パレスチナと彼女の想いを馳せる国、人々は広がついていきましたが、その根っこは「平和のベクトル」でつながっていたのです。

栄里子さんにとつてグアテマラの人々との関係、レコムでの活動は、世界の人々が置かれた状況に想像力を働かせ、つながっていくための出発点であり、開かれた窓であり、支えとなる根っこでした。今年5月12日、庭野平和賞受賞のため来日したロサリーナさんに私がお会いした時、「彼女が亡くなったのはとても残念です。彼女がグアテマラの人々のためにしてくれたたくさんのお話を私たちが忘れません」と声をかけて下さいました。彼女は照れながら喜んでいることでしょう。

コナビグアのロサリーナさんが庭野平和賞を受賞され、10日東京で授賞式、12日京都でシンポジウムが開催されました。

そもそもレコムが設立されたのは、21年前の1991年12月、コナビグアが多田謡子反権力人権賞を受賞、代表として来日したロサリーナさんの講演会がきっかけでした。ロサリーナさんの講演を聞いた人々が集い、レコムが生まれたのでした。

レコム 創設20周年の今年、再びロサリーナさんが来日されたことは、レコムにとっても大きな節目といえるでしょう。ロサリーナさんは変わらない暖かい言葉で、先住民族としてのマヤの立場と自分たちの活動を語ってくれました。(古谷桂信)

次回の「そんりさ」発送作業は 月 日(土)の予定です。

参加いただける方は連絡ください

メーリングリスト 会員・購読者は無料で参加できます。

E-mail recom@jca.apc.orgまでアドレスを連絡ください

ホームページ <http://www.jca.apc.org/recom>

Vol.136 ポリビア先住民政治と道路建設

Vol.132 ポリビア・ガソリン危機

Vol.135 あるコロンビア難民の死

Vol.131 エクアドル・アマゾン石油開発

Vol.134 グアテマラ・ニカラグア報告

Vol.130 中米に広がるナルコ

Vol.133 グアテマラ総選挙

Vol.129 コロンビア政治経済状況の行方

レコムに入会(もしくは購読)すると、メーリングリストにも無料で参加できます。入会したら、自己紹介メールを添えて recom@jca.apc.org までご一報を。登録します。レコムの活動は会員のみなさんによって支えられています。

☆郵便振替口座:00110-7-567396 日本ラテンアメリカ協力ネットワーク

☆会員 年 8000 円(学生 5000 円)...会の運営、総会での投票、『そんりさ』, 資料閲覧・貸出

☆賛助会員 年 10000 円(一口)...資料閲覧・貸し出し、『そんりさ』購読、総会への参加

☆『そんりさ』購読者 年 4000 円...『そんりさ』の購読、メーリングリスト参加可

レコム連絡先

〒 616-0004 京都市西京区嵐山中尾下町 20-15 太田方

TEL&FAX 075-862-2556(留守電) お問い合わせは、E-MAIL・

FAX・手紙もしくは留守番電話にメッセージをお願いします。

<レコム口座>

56万5165円

<グアテマラ基金>

2万301円

(2012年5月現在)